

～エストニア～ ～エストニア～



「タリン」とは「デンマーク人の町」の意であるが、文字通り、1219年、デンマーク王ヴァルデマール2世がリガの司教アルベルトの要請に従いタリンに上陸、トーンペアの丘に築城したのがこの町の始まりとされる。ドイツ騎士団の影響の下に住民のキリスト教化(後に騎士団の世俗化によりルター派に改宗)が進められ、1285年のハンザ同盟への加盟を機に商業都市として発展、ヨーロッパ風の町作りが進んだ。タリンは中世ハンザ同盟都市の面影を最もよく残している町のひとつであると言われる。



トーンペア城 Toompea Loss Toompea Castle
支配者が交替する度に改築された。現存の城は、18世紀にロシアの女帝エカチェリーナ2世によって知事官邸として宮殿風に改築された。「のっぽのヘルマン」と呼ばれる高さ52mの塔は町のシンボル、先端には三色旗の国旗が翻っている。



大聖堂 Toomkrik The Cathedral of Saint Mary the Virgin
トーンペア城の北隣の尖塔のある聖堂。デンマーク王がタリンに上陸してから間もなく建てたエストニア最古の教会。町がこの丘から放射線状に延びて発展したことが、手に取るように理解できる。トームは、ドイツ語のドームで聖堂の意で、この丘の名もこの聖堂に由来する。1684年の火事で焼失、その後100年の歳月をかけて復元したもので、内部の墓石には13世紀のものも含まれる。



展望台 Vaateplats

大聖堂から北へ徒歩5分、丘の上のにある海拔48mの展望台に出る。ここからの旧市街の眺望はすばらしい。丘の東側と西側にも別の展望台がある。東側の展望台からは旧市街、視界が良ければその先のタリン湾も眺望できる。



アレクサンドル・ネフスキー聖堂 Aleksander Nevski

Katedraal Alexander Nevsky Cathedral

大聖堂から東隣の旧市街に下りるピック・ヤルク通りの頂上、ロッシ広場にある。チュード湖の氷上の戦いでドイツ騎士団を破ったロシアの英雄(後に聖人に列せられる)を祀るロシア正教の聖堂。19世紀のロシア統治時代ここに住むロシア人のために建てられたが、当然ながら、エストニア市民には評判が悪い。



ネイツイトルン Neitsitorn Virgin's Tower

ロッシ広場からの小道を南に辿ると旧市街を巡らす低い城壁の傍の広場に出る。この広場にある四角い塔がネイツイトルン(処女の塔)。中世の売春婦を閉じ込めた牢獄にユーモラスな名がつけられたもの。



キェク・イン・デ・キョク Kiek in de Kok

ネイツイトルンの南側にある高さ49mの円錐形の堅牢な塔を指す。1475年に町を防衛する目的で建てられた。奇妙な名前は、低地ドイツ語で「台所を覗け」という意味を有するが、この塔の見張り台からならば台所でも覗けるほどに見晴らしが利くことを意味している。内部は幾つもの層になっていて、各階には、地図、武器、古い時代のタリンの模型などを展示している。



ラエコヤ広場 Raekoja Plats Town Hall Square

東の展望台から丘を下りて、ピック通りを途中で右折するとこのラエコヤ広場に出る。旧市庁舎広場で、今も昔ながらの市が立つ。広場の回りの建物は殆どすべてが昔ながらの姿を見せ、まさに中世にタイム・スリップしたような気分になる。広場では夏には野外バーが開店したり、野外コンサートが催されたりする。



旧市庁舎 Raekoda Tallinn Town Hall

どこかミナレット風の塔についている風見鶏の剣を付けた老兵、「トーマスじいさん」は、1530年から町を見守る守護神で、町のシンボルとなっている。赤レンガの市庁舎の建物は、1371年に建設が開始され1404年に完成。北ヨーロッパでは唯一現存するゴシック様式の市庁舎である。「市民の間」は賓客歓迎の間として使われてきた。今でもレセプションが行われ、コンサート・ホールとしても使われている。1階アーチのあるところは、中世に取引が行われた場所。



聖霊教会 Puhavaimu Kirik Church of the Holy Ghost

14世紀初頭に建てられたゴシック様式のルター派のプロテスタント教会で、外壁には1684年製木彫のあるタリン最古の時計が施されている。1433年建造のエストニア最古の鐘楼もある。教会内部には、1483年製の木彫の祭壇、17世紀製の説教壇などがある。分は13世紀創建当初の初期ゴシック様式のオリジナルで、13世紀のドイツ人入植の拠

り所であったが、他は15世紀からのものである。現在は美術館とコンサート・ホールとして使用されている。展示品のうち貴重なものは「死の舞踏」である。

太っちょのマルガレータ Paks Margareeta Fat Margaret



1529年に町の最も重要な出入口を防御するために建てられた稜堡。直径24m、壁の厚さ4.7 m、見るからに太っちょである。後に、監獄、兵舎、倉庫などに利用されたりしたが、監獄時代、愛嬌者でみんなから好かれた太った食事係の名前がマルガレータであったことに由来するとされている。現在は、海洋博物館。すぐ近くに港への出口、グレート・コースト・ゲートがある。



オレヴィステ教会 Oleviste Kirik St. Olav`s Church

高さ124mのゴシック様式の尖塔はこの町の日印。11世紀のノルウェイ王オラフ2世に捧げて13世紀に建てられた教会。その後幾度か改築された。1840年に最後の改築がなされた。



三姉妹 Kolm Ode Three Sisters

中世の市民の家屋が三軒仲良く並んで保存されている。その優しい佇まいから三姉妹となづけられた。1階と2階は居室と応接室、3階から上の階は倉庫となっているのが当時の住まい方。上階にはハッチがあり、滑車を使って荷物を揚げ下ろした。別の場所には三兄弟もある。



「長い足」と「短い足」 下町とトーンペアの丘を結ぶ長いだらだら坂道ピク・ヤルクは「長い足」、丘から聖ニコラス教会に至る階段状の近道は「短い足」とあだ名で呼ばれる。ピク・ヤルクの途中のカフェ「長い足」の長靴型の雨樋はそのまま看板になっている。この道の下町側の終点には1380年に建てられたゲート・タワーがある。



カドリオルグ宮殿 Kadrioru Park Kadriorg Palace
1718年、北方戦争でエストニアに勝利した直後にピョートル大帝が妃エカチェリーナのために建てた別荘。エカチェリーナをエストニア風に呼び代えて、カドリオルグ(カドリの谷)と名付けられた。榿、ライラック、マロニエなどが植樹されたイギリス様式の庭園の奥に後期バロック様式の宮殿がある。宮殿内に美術館がある。
宮殿の裏手に、宮殿建設中にここを訪れた大帝が寝泊まりした木造の家があり、大帝の衣服、大帝お手製の靴などが展示されている。庭園には野性のリスが住んでいる。旧市街から東へナルヴァ街道を約2km行ったところにある。



ロッカ・アリ・マレ民族生活博物館 Rocca Al Mare Estonian Open Air Museum
Estonian Open Air Ethnographic Museum
エストニア各地からの17～19世紀の実物の農家、学校、教会などを移築復元した屋外博物館。古いエストニアの風俗習慣、生活を知ることができる。敷地は 約7000平方km。民族衣装を着た職員やアンサンブルが出迎えて歌や踊りを披露してくれる。名前はイタリア語で、「海辺の石」の意。